復興庁

ジモトではたらく

岩手県版

平成31年3月発行

地元就職を考えてみよう

これから就職を考えているみなさんの中には、
地元に「残る」「離れる」という決断で
悩んでいる人もいるのではないでしょうか。
この冊子では、地元企業で活躍する先輩の
実際の仕事や休日の過ごし方などを紹介。
地元就職ならではの魅力とやりがいについて
聞いてみました。

contents

地元就職を考えてみよう …… 2

妥協しないものづくり
職人たちの思いを胸に …… 4
石川 達也さん　佐々長醸造株式会社　製造管理担当　2006年入社

地域と歩む未来を夢見て
ぶどう栽培とワインづくりにかける …… 8
佐々木 俊洋さん　株式会社エーデルワイン　総務担当　2009年入社

被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート …… 12

まずは、地元企業を知ることから始めてみよう …… 14

妥協しないものづくり 職人たちの思いを胸に

石川 達也（いしかわ たつや）さん

佐々長醸造株式会社
製造管理担当　2006年入社　花巻市出身　31歳

製造から出荷までをマネジメントする

岩手県花巻市東和町。昔ながらの風情を残す土沢商店街の一角に、白壁の店舗がある。坂道を上り、一本裏手の道へ入ると、大きな醸造所と味噌蔵、醤油蔵が並ぶ。佐々長醸造株式会社は、この地で百十余年の営みを続ける老舗だ。

入社13年目の石川達也さんは、醤油の製造管理部門で働き、製造スケジュールの調整や在庫管理、包装、出荷などを担う。11月下旬は、年の瀬の需要に向けて繁忙期の真っ最中で、製造部門の責任者と出荷予定数の打ち合わせが重要になる時期だ。

もう一つ大切な仕事は包装だという。超ロングセラーの看板商品、その名もズバリ「老舗の味　つゆ」は、中身が妥協を許さない本格派なら、包装も一本一本手包みだ。威風堂々たる「つゆ」の文字は先代副社長の直筆を高級和紙にプリントしたもの。「素材と製造方法にこだわった品質と、凛とした筆文字に恥じないよう、スタッフが背筋を伸ばして包みます。機械にはできない包装です」と石川さんは胸を張る。

正確に、スムーズに、効率良く。製造から出荷まで滞りなく運ぶよう全体に目配りし、必要に応じて年上の従業員にもテキパキと指示を出す。繁忙期を乗り切る作業の調整も、石川さんの役目だ。

中小メーカーならでは人の手と時間をかける仕事

同社は、品質本位で知られる味噌・醤油醸造業。岩手県で知らない人はいない、地元密着のメーカーだ。出荷先は業務用、一般家庭用を合わせてほとんどが岩手県内になる。「母も祖母も、佐々長さんしか使わない」「体が佐々長さんの味噌と醤油でで

他部門の責任者との打ち合わせも行う。

きている」、そんな声が励みになる。もちろん、石川さんの家族も愛用者だという。

百年以上使い続ける秋田杉の木樽の中で、急かされることなく、じっくりと熟成のときが満ちるのを待った醤油や味噌は、えもいわれぬ風味を醸す。

また、数種類の厳選したかつお節を、大釜でゆらりゆらりと泳がせるようにして取る出汁。機械では決して出せない繊細でふくよかなうま味は、他社の追随を許さない。この出汁をふんだんに使った「老舗の味つゆ」は、復興庁主催の「世界にも通用する究極のお土産10選」に選出されるなど高い評価を受けている。

職人の誇りをかけたものづくりを目の当たりにするたび、刺激を受けるという石川さん。「佐々長に入って良かった」と実感するときだと話す。

後輩指導に悩んだ時期をステップに成長

中堅の立場となり、チームの従業員への指示や、セクションを越えての調整も任される石川さん。しかし、数年前までは悩みも多かったそうだ。

「特に、後輩の指導が難しかった」と振り返る。がむしゃらに仕事を覚え、努力した1年目を過ぎて、後輩を迎える立場になった途端に「どう伝えれば理解してくれるのか、まったく分からなかった」。そこで石川さんがたどり着いたのは、「自分の仕事を見せる」「分かるまで教える」という、シンプルながら我慢強いやり方。「イライラを絶対に表情に出さないよう気を付けました」と苦笑いしながら自分も成長できたような気がすると話す。

倉庫内の商品の移動はフォークリフトで。

石川さんのある日の一日

7:45 出社
朝礼の前に各部門のリーダーが集まりミーティング。

8:00 朝礼

8:05 作業開始
包装やラベル貼り。充てんした醤油の倉庫への運搬などを行う。

10:00 出荷・配達の準備
商品の配達や出荷の準備をする。

12:00 昼食
愛妻弁当を食べる。

13:00 配達
トラックに乗り出発。盛岡市や陸前高田市、一関市などへ配達することもある。

16:00 帰社
職場に戻り伝票整理などをする。

17:00 終業
繁忙期には残業することも。帰宅後に友人とフットサルで汗を流す日もある。

上司に聞く

専務取締役
佐々木 洋平 さん

ポーカーフェイスに情熱を秘めたホープ

感情の起伏が穏やかでポーカーフェイス。いら立ったり怒ったり、声を荒げる様子は見たことがありません。とても忙しい時期でもバタバタせず、冷静でいてくれるので助かりますね。内面は芯が強く、大変しっかりしていて頼りになります。

年配の従業員から見れば息子のようだったりしますが、関係のつくり方も上手です。また、工場長や製造部門の責任者ともしっかり話してくれますし、判断も的確だと思います。入社後にいろいろな資格を取ろうと取り組む意欲も素晴らしい。

動きの激しい時代ですから、老舗企業もこれまでと同じやり方だけでは通用しません。これから石川君たちが、社の中心を担う人材として盛り上げていってほしい。ますます活躍を期待しています。

岩手県で はたらく魅力

地元就職に迷いなし モチベーションは右肩上がり

地元の高校の生物科学科に通った石川さん。就職するにあたり「自宅から通える範囲の県内企業で、接客よりも製造業」と、漠然と考えていた。社会人になって働くということのイメージがあまり湧いていなかったが、積極的に人に話しかけるタイプではないと自分を分析して、黙々と仕事をする製造業を志望した。佐々長醸造に求人があると教えてくれたのは、高校の先生だ。面接当日、工場でフォークリフトやトラックが目に入り「かっこいいな、って思ったことを覚えています」とはにかむ。

率直なところ、情熱と意欲を前面に出して入社した、というわけではなかった。「それが、今ではバリバリやってくれていますから」と、隣でほほ笑むのは、専務の佐々木洋平さん。「内面に熱いものを隠していたんでしょうね」。

味噌蔵には酵母の働きを促すといわれるクラシック音楽が流れる。

地域で愛される 商品を提供する喜び

住み慣れて、家族も友だちもいる地元・花巻が好きだ。必要なものはそろうし、慌ただしい大都会で暮らしたいとは思わない。人が住むのは「適度なイナカ」が一番いいような気がする。

就職時に選択した「地元暮らし」への思いは、今も変わらない。大人になって社会経験を積み、時に悩みも深くなる今は、なおさら「素の自分」をさらけだせる幼なじみの存在が宝物だ。一つ屋根の下に3世代で暮らせるのも、花巻に住めばこそだと思う。

同社で働く喜びの一つは、「おたくの醤油、本当においしいね」「うちでいつも使ってます」といった生の声を聞けること。地元の水と風土で醸す調味料だからこそ、地元の人の口に合い、暮らしになじむのだと実感する。地域で愛されるものづくりに携われることを、素直に幸せだと感じると話す。

自慢の商品を 積極的にアピールしたい

「口下手だから製造業」と考えて就職したが、ここでは黙々とラインに立つことが仕事ではない。いつの間にか、自分の考えをまとめて話したり、総合的に判断して指示を伝えたりできるようになっている自分に気づいた。

業務用の醤油やつゆを配達して取引先と話すことも増え、「もっと、コミュニケーション力を上げたい」と意欲が出てきたという。「せっかく自慢できる商品を積んでいるのだ

一本一本心を込めて手包みする。

から、ただ荷物を降ろすだけではもったいないと思って」。伝えたいのは、社外の人には見えない職人のこだわり、さまざまな商品の特長や使い方だ。「うちの良さを自分の言葉で伝え、取引を広げられるようになれれば」と語る石川さんは、すっかり立派な営業マンに見える。そう伝えると途端に「いや、実際にはまだ全然できません」とシャイな表情に戻ってしまったが。

同社は、デザート用商品「ヨーグルトにかけるお醤油・お味噌」を湯田牛乳公社（西和賀町）と共同開発するなど、新商品開発にも熱心に取り組む。また、関東、関西、さらに海外へと販路拡大にも意欲的だ。品質本位の姿勢と時代に合わせた柔軟さを併せ持ち、石川さんら若手の感性を融合させて、地域で輝きを増していく。

石川さんのオフショット

3世代同居の大家族 わが子の笑顔が疲れを癒す

家に帰って3人の子どもたちの顔を見ると、疲れていることも忘れて癒される、と話す石川さん。3世代同居の7人家族で「パパの存在感が薄くなりがち」と苦笑しながら、「長女はかけっこが一等賞、6歳ですでに連続逆上がりもできるスポーツ系女子」と紹介してくれた。「長男はまだまだ甘えん坊ですが、甘える相手は僕じゃなくてママですね……」と残念がるが、ヨチヨチ歩きがかわいい1歳8か月の次女には「『パパ大好き』というフレーズと教え込みました」とガッツポーズ。

後輩へのアドバイス

学校生活を送っているうちは、なかなか働くイメージが湧かないのは当然です。実際に働けば分かるし、それで構わないと思います。不安があっても、いいんです。働く前からクヨクヨして、面接に行く前から「やっていけるかな」と心配するより、まずは動いてみるといいですよ。

入社して最初に大事なことは、会社の人間としての自覚。学生と違い、社員には責任があります。たった一つの間違いでお客様や会社に大きな迷惑をかけることもあるので、仕事のできる、できないに関わらず、学生時代と意識を切り替えることが大事です。しっかり働けばやりがいを感じられるし、仕事は楽しくなります。

企業情報

佐々長醸造株式会社

所　　在　地／岩手県花巻市東和町土沢5-417
TEL：0198-42-2311
http://www.sasachou.co.jp/
代　　表／佐々木 博
資　　本　金／2,000万円
設　　立／1996年8月
従 業 員　数／40人（2018年12月現在）
事 業 内　容／味噌・醤油・つゆ・早池峰霊水の製造販売

地域と歩む未来を夢見て ぶどう栽培とワインづくりにかける

佐々木（ささき） 俊洋（としひろ）さん

株式会社エーデルワイン
総務担当　2009 年入社　花巻市出身　30 歳

技術指導員から総務への異動 立場を知って分かる仕事の本質

朝礼終了後、佐々木さんの朝は、注文書のチェックから始まる。前日終業後から朝までに届く注文を、次々と伝票に上げていく作業だ。倉庫へ足を運び、担当スタッフに商品手配するのも大切な仕事だという。「総務に異動して、最初の1、2カ月は仕事をこなすだけで精一杯でした」。

実は佐々木さん、2018年の4月からジョブローテーションにより、総務に配属されて間もない。事務職は初めての経験だ。以前に従事していた仕事は原料担当。ワインの原料を手掛けるぶどう栽培農家に、薬剤の使い方や病害虫の対策などの技術を指導する専門職だった。「もともとパソコン作業は好きな方でしたが、初めての事務作業は、やってみて分かることがたくさんあります」。小さなミスも許されない作業で、『早く、ていねいに、正確に』を目標にし、それが上手くできた時はうれしいですね。商品を受け取った方に、喜んでいただけることが励みになります」と加える。

外を見たからこそ知った 新時代の農業家の姿

花巻市大迫町で生まれ育った佐々木さんは、地元で就職したいきさつを「中学も終わりの頃でした。父が他界し、実家の農業を早く継がなければという気持ちが強かった」と話す。実家は、生食やワイン用ぶどうのほか、野菜や米などを栽培する専業農家。佐々木さんも幼い頃から跡継ぎとしての将来を描いていた。

高校卒業を間近に控えた頃のことだった。自宅近くで、以前から親交のあった「葡萄（ぶどう）が丘農業研究所」の所長から「おじいさんもおばあさんも、まだまだ元気で仕事はできる。すぐに跡を継ぐのではなく、外を見

繁忙期には売店の手伝いをすることもある。

て勉強した方がいい」と、岩手県農業研修センターを紹介された。佐々木さんは、センターで研修生として研究員の手伝いをしながら、最先端の果樹栽培について学ぶことになる。

「1年目は無償で、2年目はパートとして。繁忙期などには実家を手伝いながら勉強できたことは有難かった」という。また、同センターで覚えた知識を、実家の農園ですぐに実践できるメリットは大きかった。

ターニングポイントでの出会い 導かれたもう一つの道

同センターでは、試験栽培を行い、データ集積に関わり、パソコンスキルなど社会人としての基礎も学んだ。「ただ農作物を作っているだけでは、これからの農業は成り立たないと痛感しました。これは、高校卒業してすぐに実家を継いでいたら、気付くことのできなかったことだったと思います」。

2年目が過ぎようとしていた時、佐々木さんは株式会社エーデルワインの藤舘社長から「自宅の仕事をしながらでいいから、うちの仕事を手伝ってほしい」と声を掛けられた。もともと佐々木さんの農園は、同社に卸すワイン用ぶどうも栽培していたので、藤舘社長とは以前から面識があった。当時同社では、ぶどう栽培指導を行う担当者の定年退職が間近で、その後任として佐々木さんの栽培経験が買われたのだった。

一途に、ぶどうづくりと地元の将来を考え、コツコツと経験を積み重ねる若者の姿は、地域の誰もが認めるもので、信頼に値するものだったのだろう。

倉庫担当の仲間に手配する時も笑顔を絶やさない。

佐々木さんのある日の一日

8:15 出社

8:25 朝礼
全体で集まり朝礼を行う。

8:35 作業開始
注文伝票作成や発送手配、営業担当者との連絡などをする。

14:00 昼食
遅めの昼食。総務部では12時から15時までの間に時間差で昼食をとる。

15:00 翌日発送の注文伝票作成
午後分の受注の伝票作成や発送手配や請求書整理などを行う。

17:30 終業

上司に聞く

常務取締役 総務部長
小林 雅明 さん

持ち前の人なつっこさとポジティブな姿勢へ期待

2018年の4月から総務部に配属さればかりで、慣れない事務作業は大変だと思います。佐々木君は、以前、栽培農家さんにぶどうづくりの技術指導などを行う原料担当でした。気さくな人柄で、栽培農家さんや業者さんから可愛がっていただき、部署換えになった今でも、農家さんから指名で相談されることも。

コミュニケーション力に長け、伝えるべきことを伝え、引く時は引き、押すべき時は押すという対応力は天性のものでしょうか。客観的にものごとを捉え、分からないことは聞き、必要なことに自ら進んで取り組む姿勢は頼もしいですね。

ジョブローテーションによる総務配属は、社内のさまざまなセクションを、若く有望な佐々木君に経験してほしいから。将来がとても楽しみです。

岩手県で はたらく魅力

ぶどうとワインに関わる仕事への誇り

昭和20年代、岩手県は2度の台風で、基幹産業だった養蚕が大打撃を受けた。当時の県知事が産業復活を期して推奨したのが、ぶどう栽培だった。花巻市大迫エリアは、早期から栽培に取り組み70年ほどになる。県内では最も歴史ある地域だ。

丹精込めた生食ぶどうは、生産から出荷の過程で、規格外やこぼれ落ちた粒が大量に廃棄される。この状況打開のため、第三セクターとして昭和37年に創立したのが「岩手ぶどう酒醸造合資会社」、これが「エーデルワイン」の前身だ。目指したのはボルドーのようなワインだった。

「生食用ぶどうでのワインづくりでした。ワイン醸造企業が関わることで、一粒の無駄もなく、生産者は安定した収入を見込めるようになりました」。一方、ワイン用ぶどうの良し悪しは、形や大小ではなく、ワインに適した深みのある味わいだと加える。ぶどう栽培と同社の設立の由来を話す佐々木さんの表情は誇らしげだ。

現在、エーデルワインと契約する栽培農家は30軒以上。入社当初は、栽培のプロへ指導する立場にプレッシャーがあったと、佐々木さんは振り返る。「経験豊富な栽培農家さんですが、私のような若輩者を温かく迎えてくれました」。ワイン醸造用のぶどうは、生食用と栽培方法が異なる。指導というより、多くの栽培農家を訪問し得られる個々の経験の蓄積を集積し、その場に最良と思う手法を伝えることが、自らの役割だという。「家のぶどう畑は私が一番熟知していますが、栽培農家さんの畑は皆さんそれぞれがプロですから」という笑顔と明るい声は、周囲を和やかにする力にあふれていた。

生産者さんの畑に出向き、技術指導を行っていた佐々木さん。

自分が自分らしくいられる時間 それがふるさとでの暮らし

佐々木さんの休日は、実家での農作業で明け暮れることも少なくない。平日の出勤前、ゆとりがある時は田畑に立ち寄り、草刈りなどの作業をすることもある。しかし、まとまった作業は、休日に集中して行うという。「ここに暮らしていて、不便を感じることはありません」。幼い頃から馴染んだふるさとでの暮らし。近所の方々や長年付き合ってきた友人、そして大切な家族がいる。「心を寄せる方々と、充実した仕事、家庭、地域との交わり。どの場面でも、自然体でいられる自分がいます」と。その「楽な感覚」がいいという。

時折、家族と一緒に外出するひと時は、かけがえのない時間だ。

地域の文化を守り続け 地域の仲間と共に生きる

地域コミュニティーも大切にしてきた。中でも力が入るのは、幼

地域の伝統を今に伝える合石神楽。

い頃から参加する「合石神楽」だ。ユネスコ無形文化遺産に登録され、800から1000年伝え継がれてきたという「早池峰神楽」の流れをくむ神楽の一つ。合石とは地区の名称で、ここに暮らす数軒の家族から10名ほどが継承を担う。その一人が佐々木さんだ。

「忙しい毎日ですが、練習は欠かさないようにと思っています。地域の気持ちある方々で伝え継がれてきた神楽です。残さなければならないものと考え、取り組んできました」。地域と会社を牽引する若い力に寄せる期待は大きい。

佐々木さんのオフショット

子どもたちに「おいしい、ぶどう」を地域の仲間と着実に歩む日々

休日は、実家の畑で農作業することが多いですね。父が健在な頃は農業だけで生計を立てていたので、所有する田畑の面積は広く、草刈りや稲の管理などで、気付くと一日が過ぎてしまいます。

時々家族サービスを名目に、車で１時間ほどの盛岡市へ出向き、買い物や外食でリフレッシュしています。地元に若い人が少ないので、消防団や町内会など、地域コミュニティーに参加することも多いですね。お手伝いすることが増えると、肩書きも増えていきます。でも、これもふるさとへの貢献と思っています。

後輩へのアドバイス

友人や知人の中には、地元に残りたくても希望する職場が見つからず、やむなく離れた人も多いです。私の場合、兼業農家の生活形態で暮らしていますが、地元に残る絶対条件は、生活する基盤となる「仕事」です。希望を全て満たす会社がなかったとしても、ハードルを下げれば何がしかの仕事は見つかると思います。

知り合いの若手ぶどう農家では、枝付きのおしゃれな干しぶどうを加工販売し、成功しています。若い方々のアイディアや工夫次第で、地元でも面白いことができる可能性は無限です。自分の将来は、自らの意識の持ちようで大きく変わっていくと思います。

企業情報

株式会社エーデルワイン

所　　在　　地／岩手県花巻市大迫町大迫第10地割18-3
TEL：0198-48-3037
FAX：0198-48-2412
http://www.edelwein.co.jp
代表取締役社長／藤舘 昌弘
資　　本　　金／14,102万円
設　　立／1974年7月
従 業 員 数／22名（2018年12月現在）
事 業 内 容／ワイン製造、販売およびそれに関連する事業

被災３県の高校生・大学生の就職に関するアンケート

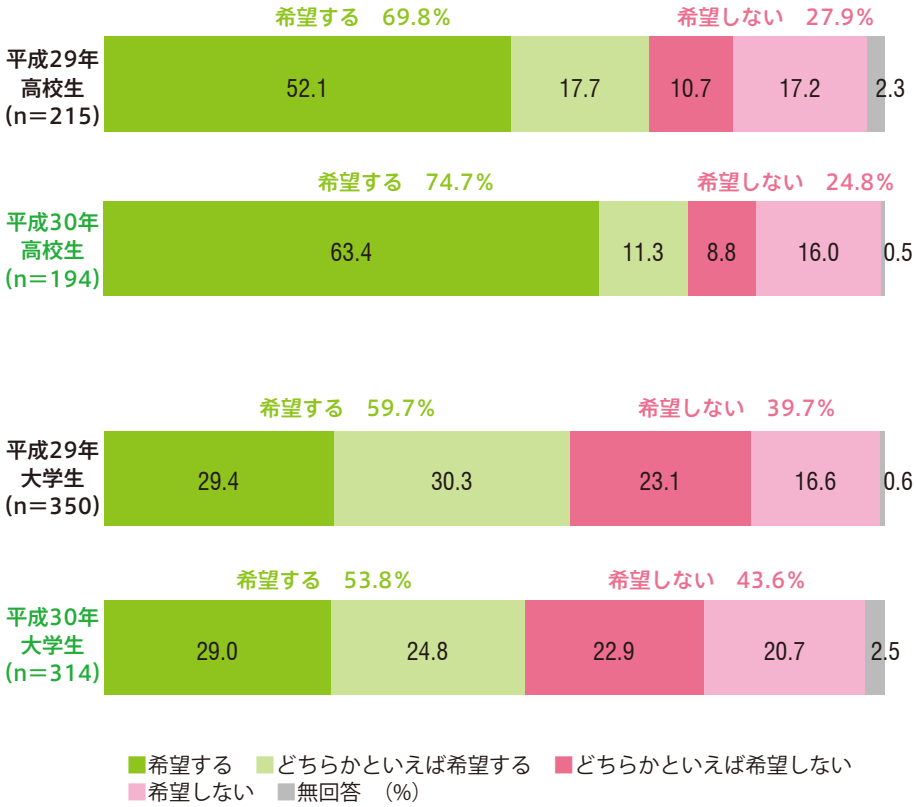
平成29年と平成30年12月に岩手・宮城・福島の高校生（水産系を中心）・大学生に対して、就職に関するアンケートを行いました。３県の学生の地元就職に対する考え方を見てみましょう。

※平成29年：被災３県高校生214名・大学生350名の回答から（2017.12 被災地における高校生・大学生・保護者の就職に関する調査）

※平成30年：被災３県高校生194名・大学生314名の回答から（2018.12 被災地における高校生・大学生・保護者の就職に関する調査）

■県内への就職希望について

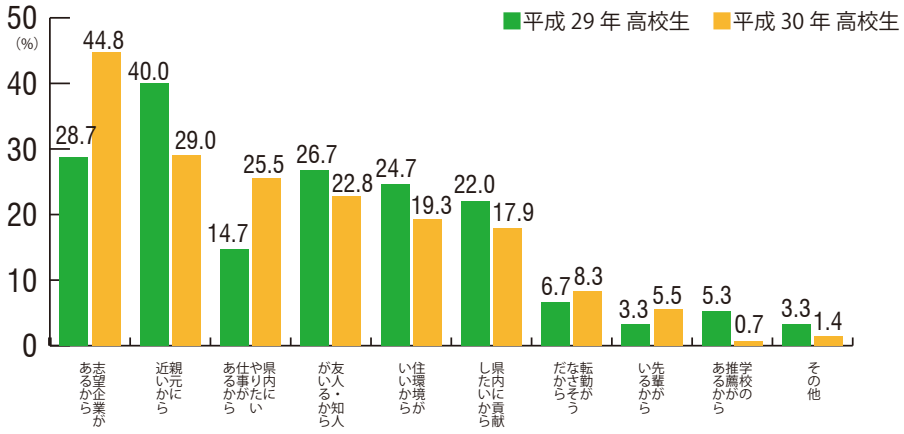
県内への就職希望者は、「希望する」又は「どちらかといえば希望する」と回答した学生が、高校生では約７割、大学生では約５割と、いずれも半数以上が県内就職を希望しています。



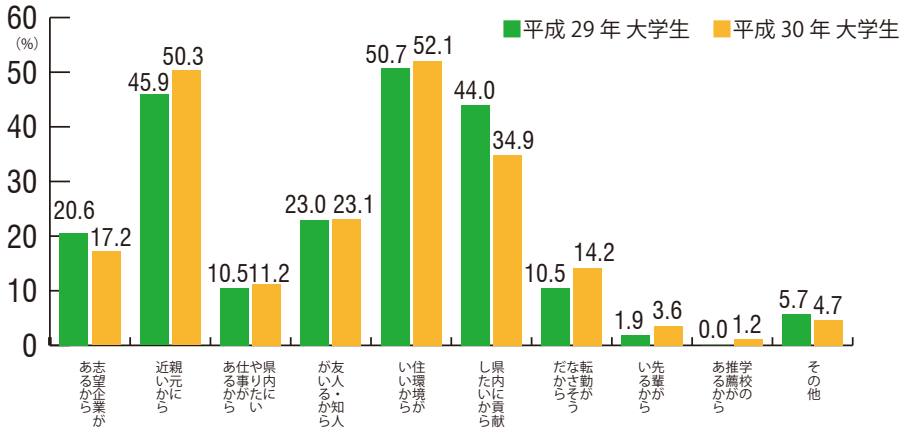
■県内就職を希望する理由

県内への就職希望理由は、高校生が「志望企業があるから」が最も多く、大学生では「住環境がいいから」「親元に近いから」「県内に貢献したいから」などとなっています。

高校生



大学生



まずは、地元企業を知ることから始めてみよう

就職先を選ぶ時に、大手就職サイトに掲載されているような、首都圏の大企業ばかりに目を向けてはいませんか？

みなさんが魅力的だと感じる企業を見つけるためには、なるべく多くの企業の情報に触れ、たくさんの選択肢を持っておく必要があります。それは、みなさんが知らない企業の中にも、魅力的で働きがいのある企業がたくさんあるからです。

「ジモト」で就職することも大事な選択肢の一つ。

今まであって当たり前だと感じていた家族や仲間、自然環境も、実はかけがえのない宝物です。

魅力ある就職先を見つけるために、地元企業を知ることから始めてみましょう。

ジモトで はたらく
岩手県版

問い合わせ先

復興庁雇用促進班
TEL. 03-6328-0274